

# フローベールの小説における反復について

三 原 智 子

## **La répétition dans les romans de Flaubert**

Tomoko MIHARA

群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編

第66巻 111—119頁 2017 別刷



# フローベールの小説における反復について

三原 智子

群馬大学教育学部英語教育講座

(2016年9月30日受理)

## La répétition dans les romans de Flaubert

Tomoko MIHARA

Le département de l'anglais

(le 30th septembre 2016)

### 1. はじめに

反復 (répétition) は文学と切り離せない。それは一つの文学技法であり、韻詩 (vers) のみならず、散文 (prose) においても多様される<sup>1</sup>。フランスの小説 (roman) についていえば、反復の技法が最もよく見られるのは、20世紀のヌーヴォー・ロマンであろう。有名なのは、マルグリット・デュラスの小説における同じ単語 (恐れ、海、子供、鳥、等々) の反復である。世界中の研究者たちがこの反復について言及し、テーマ批評、意味論、精神分析など様々な観点から分析している<sup>2</sup>。アラン・ロブ＝グリエやナタリー・サロートのテキストにおいても、同じ語やモチーフが繰り返される<sup>3</sup>。多くの場合、物語は複数のパラグラフによって細分されているが、語り手が過去と現在を行き来するため、パラグラフは時間軸に沿って配置されていない。語り手が同じ出来事や人物のことを考えるたびに、同じ語句が繰り返される。

しかし、19世紀の小説家が反復を技法として用いることは少ない。彼らのテキストにおいて、物語は原則的に線的に進んでいく。新しい出来事が次々と時間軸に沿って出現しなければならず<sup>4</sup>、同じ出来事が繰り返されることはない。ギュスターヴ・フ

ローベールもまた、小説の中で反復を用いることに懐疑的であった。そもそも、フローベールは同時代のどの作家よりも、散文固有の文体を作り出すことにこだわっていた。彼によれば、散文 (小説) は近代の発明品であるが、いまだ、書き方が理論的に確立されておらず、小説家はその確立を目指さなければならない。形式面でいえば、同じ文章、同じ言葉、同じ韻 (rime) の繰り返しは、韻文ではかろうじて許容されるが、散文では基本的に許されない<sup>5</sup>。内容面においても、類似した風景・事件・状況を繰り返し描くことは、物語の語りを弛緩させるため、できるだけ避けねばならない。実際、フローベールは友人に宛てた書簡の中で度々、類似したエピソードや表現・音が執筆中の原稿の中に頻出することを憂いていた。反復とは彼のポリシーと相反するものだったといえる。

ところが、反面、フローベールは自らの作品の中で反復の技法を巧妙に利用していた。本稿では、彼の小説の中から、『ブヴァールとペキュシェ』と『サランポー』を取り上げ、反復がどのように利用されているか、また、反復が物語の語りに対してどのような役割を果たしているか、について分析する。

## 2. 『ブヴァールとペキュシェ』

フローベール研究において、反復を論じたものは少ない。その理由の一つは、逆説的であるが、彼のある種の作品群において、類似したエピソードの繰り返しがありにも際立っているからかもしれない。例えば、『聖アントワーヌの誘惑』においては、聖者を誘惑するために、俗世の誘惑者、多神教の神々、怪物、科学的精神を体現する悪魔などが、彼の目前で行進を繰り返す<sup>6</sup>。しかし、実際には、聖者が砂漠で独り、夢を見続けているだけで、時間は数時間しか進まず、場所も変わらず、事件は起こらず、他の人間も現れない。誘惑者の行進の反復は外部の現実には関わらず、ただ、主人公の妄想の流れに従っている。ここでの反復は、ヌーヴォー・ロマンの反復に似通っているといえる。

対して、『ブヴァールとペキュシェ』は主人公の内面のみを語るのではなく、当時のフランスの政治思想状況をテキストに反映させ、現実起こった1848年の革命の様相までを物語る。その意味で、この小説は『聖アントワーヌの誘惑』と比べ、より「写実的な」である。しかし、「男爵夫人が子爵と結婚するかを知るために」読書する者は、この「百科全書的な」テキストに失望することになる<sup>7</sup>。なぜなら、ここには「冒険的行為もなければ、謀略事件もなく、どんでんがえしもないし、変化もない。動きといえば、ただ、白を回す馬のように、絶えず同じ円を描くばかり」だからだ<sup>8</sup>。小説は10章に分かれ、それぞれにおいて、二人の元書記 (copiste) がある学問に取り組んでは、それを放棄する。医学、生物学、地理学、史学、文学、宗教学、教育学など、ありとあらゆる学問が網羅されていく。30数年が経過するが、登場人物たちに変化はなく、誰も死なず、誰も小説舞台を離れない<sup>9</sup>。テキストは、見ようによっては、諸学問についての考察の寄せ集めにも見える。では、反復はこのテキストでどのような役割を果たしているのだろうか。

### 2-1. 模倣とライバル

反復の具体例を見ていこう。まず、「真似」の繰り返

返しについてである。二人の主人公は、新たな学問に取り組むにあたり、毎回、「模倣」から始める<sup>10</sup>。第2章で農学に熱中する時は、農学者ファヴェルジュ伯爵の服装や専門用語を真似し、第3章で医学を学ぶ時は、村の医師ヴォコルベイユを模倣する。彼らは医者のように診療に出かけ、医者と同様の口調で病人に話しかける。第9章で宗教に没頭する際には、村の司祭ジョフロワの口調や身振りを真似る。ペキュシェはジョフロワとの親交によって、「司祭的な雰囲気」を身に付け、「微笑みを浮かべた声の調子」や「寒そうな様子」、ならびに「袖の中に手首をすっぽり入れた着こなし」にいたるまで、ジョフロワを模倣するようになる (p.332)<sup>11</sup>。考古学に熱中する際には、主人公たちは公証人マレスコを真似て、古い陶器を収集する。家政学を学ぶ時には、村の寡婦を真似て、酢漬けを作る。こうして、彼らはほとんどの村人の動作や口調を模倣するようになる。

次に、二人の主人公たちが村人との間に起こす紛争もまた、毎回、繰り返される。ブヴァールとペキュシェは学問を熱心に追及するあまり、保守的な村人たちといさかいを起こすのだが、その過程はほぼ常に同じである。つまり、どの紛争においても、彼らは最終的に、医師ヴォコルベイユか司祭ジョフロワかのどちらかと対立するのである。なぜなら、医師と司祭は、小説舞台のシャヴィニョール村において、二つの主だった思想傾向を体現しているからだ。医師ヴォコルベイユは物質主義者 (matérialiste) であり、物質の効果により世界を説明しようとする。他方、司祭ジョフロワは精神主義者 (spiritualiste) であり、魂の存在や神の恩寵など、不可視の力の存在を信じている。そして二人の主人公は、村人と論争を起こすたびに、医師 (物質主義) あるいは司祭 (精神主義) のどちらかと逆の立場をとることで、自らの位置決定を行うのである。

たとえば、第3章において主人公たちが医学に没頭した時には、生氣 (principe vital) の存在をめぐる、医師ヴォコルベイユと論争になる。ペキュシェは、目に見えない生氣が発熱の原因だと主張し、スピリチュアリストとして医師の見立てを否定する。それに対し、ヴォコルベイユは生氣の存在を否認し、

主人公を批判する (p.131)。後に、主人公たちが磁気学に没頭した際にも、同様のことが起こる。医師は磁気存在を否認するが (p.289)、二人の主人公たちはスピリチュアリストとして目に見えない磁気作用を信じ、その結果、医師との間にひどい口論を巻き起こす<sup>12</sup>。

ところが、相手が司祭ジョフロワの場合は、二人の主人公は極端な物質主義者へと早変わりする。第3章において、地理学に没頭する際には、彼らは生物の起源をめぐって創世記の記述を否定する。彼らによれば、聖書の叙述は質量的に (matériellement) 説明がつかないのだ (p.156)。後に、宗教を学ぶ際にも、二人は、キリスト教の奇跡は自然現象に類出する不規則な例外にすぎないと断じ、司祭を批判する。司祭は抗弁して、キリスト教の摂理は俗世の理屈を受け付けないと述べる (p.357)。

このように、二人の主人公は繰り返し、医師あるいは司祭と反対の立場をとることで、論争を起こす。彼らは司祭とぶつかる際には物質主義者に、医師と争う時には精神主義者へと姿を変えるのだ。フローベールは、精神主義者と物質主義者の論争が起こっていた分野を、故意に二人の主人公たちに学ばせ、当時の論争を二人の主人公と村人との論争にすりかえたのである。結果的に、彼らと村人との対立は、領域を変えながらも、二つの思想軸に分かれて反復されることになる。

## 2-2. 学問の断念

最後に、二人の主人公たちが学問を断念するにいたる理由も反復される。具体的にいえば、彼らが地理学、磁気学 (magnétisme)、哲学、骨相学の4学問を放棄する際、類似した状況がテキストの中で繰り返されるのだ。まず、地理学の探求がどのように終わるかを見てみよう。二人の自称地理学者たちは読書で知識を蓄えた後、司祭ジョフロワを論破するために教会に出かける (p.154)。教会ではちょうど、村の名士たちの会合が開かれており、村長のフローや税務署長のジルバル氏、地主のウルト一大尉、ベルジャンプ、食料品屋のラクロワ、ファヴェルジュ伯爵、そして司祭が集まっている。二人の主人公は

大洪水や創世記や天地創造などの聖書の文言を、非合理的として否定する。二人は進化論を提唱し、人類が猿さらには魚を先祖に持つと主張する。集まっていた名士たちは大笑いするが、司祭は二人を「なんという物質主義者！」となじり、その主張を認めない (p.157)。ここまでは、物質主義者 VS 精神主義者という対立が機能している。司祭 (と村人) が精神主義者であるゆえに、主人公たちは極端な物質主義の立場をとっているのである。ところが、ここに医師ヴォコルベユが現れ、この対立構造を崩してしまう。物質主義者であるはずの医師は進化論を平然と否定し、人類が猿や魚から進化したという説を受け付けようとしなない。ここにおいて、二人の主人公たちは敵として、精神主義者の司祭と物質主義者の医師との二人を有することになる。彼らは自らの立場を決めかね、結果的に、地理学を放棄するにいたる。

磁気学の断念についても、同様のことが起こる。第8章において、ブヴァールとペキュシェは物質主義者の医師ヴォコルベユを論破するために、村の名士を磁気の実験に招待する (p.285)。二人の家に、医師、ジョフロワ司祭、クーロン、ラングロワ、村長フォーロー、ベルジャンプ、プチ、マレスコなど、すべての村人たちが集まってくる。上記の地理学とまったく同じ状況である。主人公たちは霊媒者に磁気をかけ、ヴォコルベユ夫人の現在の行動を遠視させる。医師ヴォコルベユは磁気学をインチキ呼ばわりする。そこに、ヴォコルベユ夫人からメモが届き、彼女がまさに霊媒者の告知通りの行動をとっていたことが判明する。二人の磁気学者は懐疑的な物質主義者に勝利したのである。ここまでは、「物質主義者の医師 (と村人) VS 精神主義者の磁気学者」という、いつもの対立構造が成立している。しかし、ちょうどその時、精神主義者であるはずの司祭ジョフロワが乱入し、磁気の実験を非難する。司祭の乱入は、精神主義 VS 物質主義という村の思想構図を覆すことになる。二人の主人公は、それまで、物質主義 (医師) あるいは精神主義 (司祭) のどちらかと常に真逆の立場をとることで、自らの思想的立場を決定していたのに、今や両者を敵に回し

てしまうのだ。ブヴァールとペキュシェは二つの思想潮流のどちらを標榜すべきか決められず、実験の成功にも関わらず、磁気学の探求をやめてしまう。

哲学の探求の終わりににおいても、同様のことが反復される。第8章で、ブヴァールとペキュシェは哲学的思索にのめりこみ、自宅にひきこもる。ある日、医師ヴォコルベイユがペキュシェの熱病の治療に訪れる。ペキュシェは物質主義者の医師をやり込めようと、「人間の肉体はその人物の真の存在に近づくことを妨げるマスクのようなものである」と主張する(p.314)。しかし、医師は哲学問答の相手をせず、去っていく。その直後、二人は家の近くで司祭ジョフロワと出会う。ペキュシェは、天地創造は起こらなかった所以を、ヘーゲル理論に即して述べるが、驚いたジョフロワ神父は何も言わずに、辞してしまう(p.314)。村の二つの精神基軸たる医師と司祭が共に、主人公の論述に答えることなく、即座に場を離れるのだ。物質主義者と精神主義者の両方の敵を失い、主人公たちは自らの思想の位置づけを見失う。彼らはやがて形而上学の探求を断念することになる。

最後に、第10章において、ブヴァールとペキュシェは骨相学に取り込むが、この学問の放棄の仕方でも上記の3場面と同様である。二人は教会の門先で通行人を捕まえては頭を測っていたが、司祭ジョフロワが突然そこに現れ、二人の骨相診断は「物質主義と宿命論を推進する」と非難する(p.374)。司祭によれば、骨相学は「泥棒や人殺しや姦通者が、自分たちの罪を頭のデコボコのせいにする」ことを許すであろう。司祭は、骨相学は神の全能を否定するものだ、と批判し、二人を教会の門前から追い払う。ここまでは、司祭ジョフロワ VS 主人公という対立構造が成立している。しかし、その後、医師が出現する。医師ヴォコルベイユによれば、頭蓋骨の形で人の性質を知ることができず、骨相学は疑似科学にすぎない。医師の挑発を受け、主人公は骨相学の根拠を示すために村人たちの頭を探り、その性癖を見事に言い当てる。磁気学の実験と同様、主人公たちは医師に勝利したのだ。それにもかかわらず、やがて、主人公たちは骨相学を断念する。司祭と医師の両者に批判され、彼らは自らの立場を選べなくなっ

たのである。

以上の4例から分かるように、二人の主人公は物質主義と精神主義の二項対立からなる構造が成立しなくなった時に、自らの立場を失い、結果的に学問をやめてしまう。というのも、ブヴァールとペキュシェは医師と司祭のどちらかに抗して思想を決定していたため、この両者が共に自らの論敵となると、思想的立脚点を失ってしまうのである。

こうして、主人公は、村人の「模倣」、村人との「抗争」、学問の「断念」、という過程を各章において反復する。我々の意見では、逆説的ではあるが、この反復が物語を成立させ、そのおかげで、テキストは、様々な学問についての切れ切れの論説(dissertation)の寄せ集めになることを、かろうじて免れている。実際、テキストが小説らしくあるためには、そして、フローベールがいうように、「哲学論述のように見えないためには、プロットのようなもの、ある種の物語のようなものが続かなくてはならない」<sup>13</sup>。しかし、物語が続くためには、二人が村人を模倣し、そこから、村人とライヴァル関係に入り、さらには、このライヴァルに打ち勝とうとすることが必要である。さもなければ、競争心を失って、二人の主人公たちは難解な学問探求をすぐにあきらめ、物語は展開しないだろう。しかし同時に、学術的論考が際限なく続くことも避けねばならない。主人公たちの学問探求はライヴァルとの競争の果てに、やがては放棄されねばならない。そのためには、彼らが物質主義と精神主義の対立の中で自らの思想的立場を見失うことが必要である。その後、彼らはまた別の村人の模倣を行い、学問をめぐるその村人とライヴァル関係に入り、やがては、思想的立脚点を失ってその学問を再び断念するであろう。つまり、「村人の真似と争い、ならびに学問の断念」というサイクルの反復は、テキスト内で諸学問の考察が入れ替わりながら続くことに、「小説らしい」根拠を与えているのである。

### 3. サランボー

『聖アントワーヌの誘惑』、『ブヴァールとペキュ

シェ』ならびに初期作品以外のフローベールのテキストは、いわゆる写実主義小説と呼ばれ、物語が時間軸に沿って線的に進む。物語の進行は3人称の語り手によって統括されている。したがって、これらのテキストにおいて、反復が小説技法として用いられることは、理論的には考えにくい。

### 3-1. 戦争の原因

しかし、フローベールの第二作『サランボー』には、反復の要素がいくつか見られる。顕著なのは、傭兵戦争の勃発前の状況である。テキストの1章から7章は、戦争が本格化する前のカルタゴの政治・経済事情を描いている。傭兵側の状況、カルタゴ側の事情、ならびに、傭兵の長でありかつカルタゴ政務官のアミルカール (Hamilcar) の事情がそれぞれ語られるが、そこに、同じ事態の繰り返しが見られる<sup>14</sup>。ちなみに、アミルカールは、傭兵とカルタゴとをつなぐ楔の役割を果たしている。

まず、傭兵側の状況を分析しよう。傭兵たちにとって、戦争の原因ははっきりしている。彼らは不公正感 (le sentiment d'injustice) に動かされ、カルタゴ共和国に対して反乱を起こす。テキストによれば、「酔いが増すにつれ、彼らはますますカルタゴの不公正 (l'injustice) を思い出した」<sup>15</sup>。彼らは自分たちの「労苦 (leurs fatigues)」があまりにも「報われない (trop peu recompensées)」と憤る (p.62)。傭兵たちはさらに、カルタゴの政務官アノンが偽の貨幣で彼らに給金を支払おうとしたことに怒り、かつ、同僚の兵士がカルタゴに殺されたと信じ、「これほどまでの不公正に彼らは激怒した (Tant d'injustice les exaspéra)」 (p.100)。カルタゴの要職者は、傭兵たちを懐柔するため、「彼らの要求に対して公正 (justice) に応える」と宣言し (p.117)、「軍事予算会計 (comptes militaires)」を特別に承認する。そして、カルタゴ将軍ジスコンが傭兵野営地に降り立ち、兵隊たちに褒美を配るとともに、裁判官 (juge) の役割を果たす。彼は、兵士のふりをして不法に褒美をもらおうとした農夫を「泥棒！」と怒鳴りつけ、農夫はただちに首をはねられる。しかし、実は、ジスコンは十分な金を持っておらず、「シシットの会計

(comptes de Syssites)」のごまかしを説明することもできない。やがて傭兵たちの怒りは爆発し、彼らはジスコンを捕えてしまう。戦争は避けられないものとなる。

カルタゴ側においても、同様のことが反復される。カルタゴ人は傭兵たち同様、「会計勘定 (comptes)」のことばかり話し、そして「不公正 (injustice)」を糾弾する。実際、カルタゴ共和国にとっては、傭兵たちの要求は、国家予算のことを鑑みれば、「公正」からは程遠い。政務官アノンは真に公正な会計勘定はいかなるものかを示そうと、共和国の切迫した財政を説明し、「政府が行ったすべての支払いについて、一つの数字もあますことなく」傭兵たちの前で数え上げる (p.96)。カルタゴにとっての「公正」は、兵士たちの不当な要求ではなく、これらの数字と計算 (comptes) の正しさの中にあるのだ。こうして、カルタゴ商人たちは、傭兵が「雄羊一匹に対して、鳩一羽分」の代金しか払わないことに憤り、「三匹のヤギと交換に、ザクロ一個分」の代金で済ませることに怒りの叫びをあげる (p.118)。しかし、ここで、裁判官の役割を担うのは、「不浄物食い (Mangeurs-de-choses-immondes)」と呼ばれる民である。彼らはカルタゴ商人が不正を行っていると言明し、その結果、傭兵たちは商人を殺そうとする。傭兵たちはさらに、1升の小麦に対し、一袋の薄力粉の400倍もの値段を要求し、カルタゴ人を憤慨させる。結果的に、カルタゴと傭兵の間の亀裂は決定的なものとなる。

元傭兵隊長でありカルタゴ政務官であるアミルカールにおいても、同様の状況が反復される。帰国してすぐ、彼は執事に「船舶、隊商、小作地、家内の会計勘定 (comptes)」を見せるように命じ、彼自身が収支を確認する (p.195)。彼は「異端裁判官」のごとくに怒りにかられ、横流しの罪により「調香係」の死刑を命じる (p.203)。その後、「泥棒、怠け者、反抗者を連れてくるよう」命令し、それぞれに対し罰を下す (p.205)。同時に、アミルカールは傭兵たちの奪略を見て取る。兵士たちは酔いに任せて、彼の家のすべてを食い尽くし、破壊したのである。会計勘定にはその数字がはっきりと記されていた。カ

ルタゴ議会で、傭兵を擁護したばかりのアミルカールは裏切られたと感じる。不正義 (injustic) が傭兵によってなされたのである。アミルカールは怒りに駆られ、傭兵懲罰隊長としてカルタゴ軍を率いることを決意する。

このように、テキスト前半で、同じ状況が3度反復される。傭兵もカルタゴ人もアミルカールも、皆、自分たちの「会計勘定 (comptes)」のことばかりを気にしている。それぞれにおいて、裁判官がいて、会計について不正を行った人物を殺させる、あるいは殺そうとする。しかし、それぞれが「正義」がないがしろにされたと憤る。そして、最後に、不公正感に駆られて、戦争へ道を選ぶのである。不公正感から出発しての戦争への突入という行程の繰り返しは、読者に、対立する3者が実は同じ論理に突き動かされていることを知らせる。反復は読者に、傭兵もカルタゴ人も英雄アミルカールも皆、古代人 (les Anciens) であり、19世紀の論理とは異なる論理によって行動することを教える。つまり、反復が語りの代わりに、読者に重要な事実を示唆するのである。

### 3-2. 運命の反復

『サランボー』においては、上記に加え、人物たちの「死に方」もまた反復する。例えば、反乱傭兵たちの最期は、アミルカール子飼いのライオンの最期の繰り返しである。第1章において、満腹した傭兵たちは「穏やかなライオンの姿で」アミルカールの宮廷の庭で寝転んでいたが (p.59)、まもなく酔いにまかせて、宮廷子飼いのライオンすべてを虐殺する。ところが、最終章で、立場を変えて、まったく同じ状況が繰り返される。今回は、野生のライオンが生き残った傭兵たちを貪り食い、やがて、腹を満たし、満足げに野原に横たわるのだ (p.368)。悪がそれを成した者に還っていくかのように、ライオンの運命は傭兵の上に反復される。言い換えれば、傭兵の残酷な最期は、冒頭部において、彼らがライオンを虐殺した際に定められていたのである。

同様のことは、3人の主要登場物の死についても当てはまる。主人公マトー、ヒロインのサランボー、そして奴隷スパンディウスの死はそれぞれ、あらか

じめ描かれている。テキスト最後に訪れる彼らの死は、テキスト冒頭において、詳細に先取りされているのである。

まず、元奴隷のスパンディウスの死を見てみよう。彼の死は、かつて彼と仲間の傭兵たちがライオンの死骸の群を見かけた時に、既に予告されていた。スパンディウスはこれらのライオン同様、十字架にかけられて死ぬ。テキストはライオンの死骸について次のように語っていた：「その巨大な鼻面は胸の上に落ちていた。そして、二本の脚はまるで鳥の二枚の翼のように、広く離されていた」(p.85)。スパンディウスと仲間の傭兵もまた、「あごを胸の上に落とし」「両腕を頭よりも高く上げたまま」、十字架に架けられる (p.357)。両者共に、同じポーズで死ぬのだ。また、ライオンの「黒い血」が「毛の中を流れ、つららのように分かれ、しっぽの先端で集まった」のに対し、傭兵の血は「あたかも木の枝々から熟した実が落ちるかのように、ゆっくりと大きなしずくとなって落ちていった」。両者の血は共に下に落ちながら枝分かれし、複数の線を描いていく。さらに、シッカの道では、十字架に架けられたライオンの頭上を「カラスの群れが空を (dans l'air) 舞っていた」のに対し、傭兵の頭上では、ハゲワシたちが飛び回り、その鳴き声が空に (dans l'air) 響いていた (p.358)。

このように、テキスト冒頭に描かれたライオンの死骸は、最後に描かれるスパンディウスと仲間の傭兵の死骸の先触れであった。とはいえ、読者がこの反復に気付くのは、傭兵たちが死ぬ直前でしかない。スパンディウス自身が十字架上で、「シッカの道でのライオンを覚えているか？」と友人に語りかけ、それにより、読者にかつてのライオンの死骸群を喚起するのである (p.358)。スパンディウスはいわば、反復の通告者であり、読者は彼から、反復について事後的に知らされるのだ。

主人公マトーについても同様のことが言える。読者は、彼の処刑の間際に、その運命が前もって決定されていたことを知る。テキスト最後のマトーの死は、テキスト前半において彼がカルタゴの守り神のヴェールを盗んで逃亡した際に、予告されていた。



実際、二つの場面は、驚くほどに似通っている。どちらにおいても、カルタゴの群衆がマトーの歩く姿を見るために、場所を求めて道を埋め尽くす。彼らはマトーの動きに合わせて、次のように同じ動きを見せる。マトーがヴェールを盗んで逃亡する際には、「道は彼が近づくとつれ、無人となった。そして大量の人々が逃げ出し、再び飛び出して、壁の頂上まで達した」(p.146)。処刑の際は、「人々は彼を見た信じ、群衆は神殿まで押し寄せた。道は無人となった。その後、群衆はささやきながら戻ってきた」(p.370)。また、両方の場面において、カルタゴの街全体が大きな叫び声で埋め尽くされる。さらに、カルタゴ人たちは、毎回、マトーに向かって、物を投げることができない。マトーがヴェールを盗んで逃亡した際には、ヴェールの破損を恐れて、カルタゴ人はマトーに武器を投げることができず、マトーの処刑の際には、カルタゴ政府が人民に「マトーに対して何も投げてはいけない」と命じる(p.370)。

マトー自身もまた、同じ動きを繰り返す。ヴェールを盗んで逃亡した時には、「遠ざかっていくライオンのように」街を歩き(p.146)、処刑される寸前には、「野生の猛獣のように愕然とした様子で」、独房から外に出る(p.373)。また、どちらの場面においても、彼はまず、カルタゴで最も高い場所から出発し、迷路のような道を通り、最後にカモン広場に到着する。そして、このカモン広場において、カルタゴ逃亡の際、マトーは「あたかもこれから死ぬ人であるかのように青ざめ」(p.147)、急に立ち止まる。これは、彼自身の処刑を先取りしているといえよう。というのも、マトーはまさにこのカモン広場において、後に処刑されるからだ。

このように、彼のカルタゴ逃亡の場面は、彼の処刑場面を予告していた。しかし、読者がこの予告について知るのには、事後的でしかない。マトー自身が処刑の直前に、反復のことを読者に知らせるのである。拷問によって死にかけながら、「彼はかつて、同じような何かを感じたことを思い出した。それは、石垣上の同じ群衆であり、同じ視線であり、同じ怒りだった。しかし、かつて、彼は自由に歩いていた。あの時は皆が道をあけたのだった」(p.375)。マトー

は、スパンディウス同様、自己の死が過去の出来事の繰り返しであることを、死の直前に読者に告知するのである。

ヒロイン、サランポーは婚礼の最中に死ぬ。最終章に訪れるこの死もまた、テキスト冒頭の祝宴の場面で予告されていた。二つの場面の類似性は否定しがたい。両方において、太陽は沈んだばかりで、ランプの光が揺れ、話し声と歌声が混じって聞こえ、幸福感が満ちている。テキスト冒頭の傭兵たちの祝宴においては、「くつろいで飲み食いできる喜びがすべての者の目にあふれていた」し(p.69)、テキスト最後の結婚式においては、「人々は夢のような幸福に溺れていた」(p.373)。客たちは、毎回、同じ果物(すいか、レモン、ザクロ)を食べ、同じような食器を用いる。最初の傭兵の祝宴では、「金のへら」や「貴重な真珠が埋め込まれた皿」が供され、最後の結婚式においては、「べっ甲のスプーン」や「真珠でふちどりされた二枚一組の皿」が使われる(p.373)。

何より、冒頭の傭兵の祝宴において、サランポーはマトーに一杯のワインを授ける。彼女を取り囲んでいた傭兵たちはそれを婚約の印と解釈した。このワインを飲んでまもなく、マトーは「あたかも、死の原因となる飲み物を摂取した者のように」、「打ち勝ちがたい麻痺状態」に入る(p.88)。最終章では、サランポーは、彼女の結婚を祝うカルタゴ人たちの前で、ワインのカップを上にかかげるが、それを飲む寸前に崩れ落ち、死んでしまう。二つの場面は、シンメトリーを成しながら、同じ状況を反復している。しかし、読者がこの繰り返しの気付くのは、やはり事後的でしかない。ここでもまた、テキスト最後に現れた告知者が、過去の類似した場面の存在を読者に知らせるのである。すなわち、結婚式の最中に、「何人かの者が傭兵の祝祭を思い出」するのである(p.373)。

このように、テキスト最後の結婚式でのサランポーの死は、テキスト冒頭の祝祭でのマトーの麻痺状態によって先取りされしていたが、これは、スパンディウスの死がライオンの死によって先取りされ、カモン広場でのマトーの死が同広場での彼自身の停止状態によって先取りされてたのと同様である。フ

ローベールは、テキストの最後にやってくる3人の死を、冒頭において入念に準備していたのだ。これらの反復は、読者に主要登場人物の宿命を効果的に印象付けることになる。死の繰り返し、あるいは死の先取りという演出により、主要登場人物の死が最初から予定されていたことが、読者の目に明白になるのだ。

#### 4. 結論

以上、我々は『ブヴァールとペキュシェ』ならびに『サランポー』における反復について分析してきた。前者においては、二人の主人公が「村人たち（それぞれ学問の専門家である）を真似し、彼らと対立し、その後、対立が解消した段階でその学問を断念する」、という行程が反復された。後者においては、傭兵、カルタゴ市民、英雄アルミカールの3者が「会計勘定 (comptes) にまつわる不正感から大規模戦争へと参入する」、という行程を反復した。また、主要登場人物のマトー、サランポー、スパンディウスの死は前もって先取りされ、繰り返されていた。

これらの反復は、物語の語りを代行し、語り手にかわって、読者に情報を伝えるという役割を果たしていた。『ブヴァールとペキュシェ』においては、反復により、テキストに「ある種の物語のようなもの」が生まれ、テキストがただの哲学的考察文になることを防いでいる。また、『サランポー』においては、戦争前の「不正感」と「会計勘定」をめぐる反復は、読者に、傭兵もカルタゴ人も英雄アミルカールも皆、古代人 (les Anciens) であり、19世紀の読者とは異なる論理によって行動することを教える。また、主要登場人物の死の反復は、読者に3人の主要登場人物の宿命を印象付ける。彼らの死が最初から予定されていたことが、死の先取りという演出によって、明白になるのである。

このように、フローベールの二つのテキストは、反復によって、小説らしさを生み出すとともに、重要な情報を読者に知らせている。ここでは、反復は物語と邪魔するのではなく、反対に、その効率的な進行を助けているのである。

#### 注

- 12世紀から16世紀の韻文テキストにおける反復については、Séverine Abiker, *L'Écho paradoxal: Étude stylistique de la répétition dans les récits brefs en vers XIIIe – XIVe siècles*, thèse de doctorat, Université de Poitiers, 2008 を参照。
- Jiri Sramek, «La fonction des répétitions dans la composition de *l'Amant* de Marguerite Duras», *Sbornik Praci Filozofické Fakulty Brenénske Univerzity Studia Minora Facultatis Philosophicae Universitatis Brunensis*, L. 20. 1992.
- Sarah Marie-Madeleine Anthony, *Les figures de la répétition intratextuelle chez Nathalie Sarraute: Leitmotive, clichés, lieux communs, topoi et stéréotypes*, theisis for PhD, University of Toronto, 2012.
- 例外としては、一人称の小説において、思い出を語るために反復が利用される場合であろう。ジェラルド・ド・ネルヴァルの小説『シルヴィー』で、主人公「私」は劇場に通い、ある女優の演技を見つめる。女優は毎日、同じ衣装を身に着け、同じ演技を繰り返す。ある日、主人公は、自分が夢中になっているこの女優が、実は少年時代に一目惚れした美少女の反復ではないかと気づき、衝撃を受ける。このテキストでは、「思い出」「白」「金髪」「声」などの語が繰り返し用いられる。過去と現代を行き来する「私」の心情に合わせ、反復が効果的に使用されるのだ。参考：湯浅博雄『反復論序説』1996年、未来社、p.9-54（『シルヴィ』を読む）。
- とはいえ、フローベールは、美的かつ小説的な演出に必要であると判断した場合は、故意にある音を同文の中で繰り返した。
- ミシェル・フーコーはこれらのこれらの誘惑者を「宇宙論的系列」「歴史的系列」「予言的系列」「神学的系列」に分けていた。ミシェル・フーコー『幻想の図書館』1991年、哲学書房、p.40-49。
- Lettre de Flaubert à Madame Tennant, 16 décembre 1879.
- Auguste SABATIER, l'article publié dans *Le Journal de Genève*, le 3 avril 1881, repris par Richard BOLSTER, «Bouvard et Pécuchet et la critique de 1881», *Bulletin des Amis de Flaubert*, no59, déc. 1971, p.5.
- René Descharmes, *Autour de Bouvard et Pécuchet*, Librairie de la France, 1921, p.84-85.
- 詳細については拙稿参照：Tomoko MIHARA, «Fictions du savoir, savoirs de la fiction dans *Bouvard et Pécuchet*», *Revue Flaubert*, n° 11, 2011, numéro dirigé par Yvan Leclerc.

- 11 Gustave Flaubert, *Bouvard et Pécuchet*, édition présentée et établie par Claudine Gothot-Mersch, «Folio classique», 1999, p.96. 『ブヴァールとペキュシェ』からの引用は常にこの版を用い、引用にあたっては文末にページ数を付す。
- 12 物質主義と精神主義の対立については、Atsushi Yamazaki, «*Bouvard et Pécuchet* ou la gymnastique de l'esprit», *Revue Flaubert*, n. 7, 2007 参照。
- 13 Lettre à Edma Roger des Genettes, 15 avril 1875, *Correspondance*, t. IV, p.920.
- 14 拙稿参照：Tomoko Mihara, «*Salammô* au croisement entre l'Antiquité et le moderne: la psychologie ou la fatalité», *Études Critiques*, site Flaubert, 2016.
- 15 Gustave Flaubert, *Salammô*, chronologie, présentation, notes, dossier et bibliographie par Gisèle Séginger, «GF» Flammarion, 2001, p.61. 今後、『サランボー』への参照はこの版によるものとし、文末にページ数をカッコ内に付す。

